
バカとFクラスと疑心暗鬼

JOKER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとFクラスと疑心暗鬼

【Nコード】

N9065U

【作者名】

JOKER

【あらすじ】

ここ文月学園は春を迎えたそこに一年の終わりに転校してきたオリジナル主人公とFクラスが繰り広げるばかな物語

オリキャラ紹介

オリキャラNo.1

2-F所属

火群浩樹《ほむらひろき》

特徴頭にバンダナを付けている周りがうるさいと「ダメ人間」と言う

召喚獣

装備全体がオレンジ色で袖の部分は薄い青と交互になっている武器は刃が三つ付いている小太刀の二刀流

得意科目 化学 数学苦手科目 英語系全てほとんど10～50点その他平均てき

腕輪 ダークマター

黒い光線を出す消費点数100点

オリキャラNo.2

2-A所属

嵐丘 咂魅《あらしおか あみ》

特徴青い髪ショートヘア天然キャラ本人いわく優しい愛人らしい主人公からすればお節介

召喚獣

装備アメフトの防具武器はブーメラン（鉄製）

得意科目 現国

苦手科目なし

腕輪乱れ投げ

ブーメランを10本投げると10点消費

Fクラスで・・・（前書き）

書いてみました

ちなみにストーリーは原作どつり行くつもりです

Fクラスで・・・

ここ文月学園は春を迎えていた

浩「ふああゝあ眠っ」

そう言つて俺火群浩樹《ほむらひろき》は学園へ向かう

鉄「遅いぞ火群！」

声がしたためそこをみると筋肉質な男教師がいた

浩「あ、鉄人」

鉄「西村先生と呼べ！まあいいお前に渡すものがある」

そう言つて鉄人は俺に封筒を渡してきた

鉄「それは振り分け試験の結果ださっさと見て自分のクラスに行け」

浩「へいへい」

そう言つて俺は中身をみた

火群浩樹ーFクラス

それを見て俺は

浩「何故ですか？」と聞いたそしたら

鉄「貴様が試験の時寝ていたからだろうが！！！」

そう言われた

浩「そーいやそーだ」

そーいった

火群浩樹は本当はAクラスの实力を持つだが振り分け試験が途中で面倒くさがり寝ていたためFクラスになった

そして俺は他のクラスを無視してFクラスに向かった

浩「・・・ここか」Fクラスだと確認して教室に入ると

浩「・・・うわぁ」

と、つい声を出してしまった席は決まっていなかったため廊下側の一番後ろに座った

そこに一人入ってきたそうすると

？「早く座れ！！このウジ虫野郎」

の一言でムードを壊した

？「って雄二何やつつの？」

と聞いていた

雄「先生が遅れてるらしいから教壇に上がってみた」

雄二と呼ばれた男はいつのまにか教壇に上がっていた

担任「えーとちよつと通してもらえますかね？」

それと席についてもらえますか？HRを始めますので

2・Fクラス担任の・・・福原慎ですよろしくお願いします」

黒板に名前を書こうとしたがやめた

浩「（チヨークすら無いのかよ、まあどうでもいいけど）」

後から知ったことこのクラスは自給自足らしい

福「では自己紹介でも始めましょうかそうですね廊下側の人からお願います」

そういつて自己紹介が始まった

秀「木下秀吉じゃ演劇部に所属しておる一年間よろしく頼むぞい」

そういつて自己紹介を終わらせた

浩「（秀吉ってことは男か知らなければ女に間違えられるだろ）」

ム「・・・土屋康太」

浩「（短いな）」

？「ーです海外育ちで日本語は読み書きが苦手です

趣味は吉井明久を殴ることです」

浩「（最悪な趣味だな）」

Fモブ「ーーですよろしく」

気がつけばもう俺のぼんだった

浩「火群浩樹だよろしくな

好きな物は特にない嫌いな物は人間だ

趣味は特にない

まあ一年間よろしく頼む」

それからしばらくすると

明「えーっと吉井明久です気軽に『ダーリン』って呼んでください

ね
♪
L

Fクラスで・・・（後書き）

感想をお待ちしております

オリジナルストーリーを考えてくれたら嬉しいです

Fクラスで・・・？（前書き）

ちなみに続きです

自己紹介と根拠の話だけで三話めですすいません

Fクラスで・・・？

浩「（呼んでたまるか）」

そう考えていたら

Fクラス全員「「「ダアアーリーン！！」」」

と呼んでいた

浩「呼ぶのかよ！！！」とつい声を出してしまったうわぁ呼ばれた
本人もキモチワルがっていた

？「あの・・・遅れてすいま・・・せん」

ふと見ると一人の女子がいた

福「丁度自己紹介している所なのであなたもお願いします」

姫「あの姫路瑞希といえますよろしくお願いします」

ん、姫路つていやAクラスのはず

どうやら途中退席で0点扱いらしい

騒がしくなった所に担任が教壇を叩くとガラガラと崩れた

同時に坂本と吉井が廊下に出ていた

そして担任が戻ってきて坂本が自己紹介を始めた

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

さて皆に一つ聞きたいAクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいがー不満はないか？」

Fクラス全員「『大ありじゃあッ！！！！』」

浩「・・・またハモってる・・・その気合いを勉強に使えよ」

雄「なんだ火群お前は設備に不満は無いのか？」

浩「俺はどうでもいいそれに浩樹でいいぜ代表」

雄「そうかだったら俺も雄二でいい

話を戻すが俺だってこの現状は大いに不満だ」

Fモブ1「いくら学費が安いからってこの設備はあんまり！」

Fモブ2「Aクラスだって同じ学費だろ！？改善を要求する！！！」

雄「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」その時は時間が止まったように思えたそして徐々に人を信じようとおもっただが

Fモブ3「そんなの勝てるわけがないだろ」

Fモブ4「これ以上設備落とされたらどうなるんだ？」

Fモブ5「姫路さんがいたら何もいらない」

俺は最後のラブコールを無視して

浩「んなもんやってみねーとわかんねーだろ！！！」

とつい大声で言っていた

雄「そのとうりだ必ず勝てるいや俺が勝たせてみせる」

Fモブ6「無理に決まってるじゃん」

Fモブ7「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄「根拠ならあるさ」

雄二がそんなこと言っていた根拠なんてあるのかよ

雄「このクラスには勝つための要素が揃っているそれを今から説明してやる。」

おい康太いつまで姫路のスカート覗いてるんだ」

ム「・・・（ブンブン）」

必死にごまかすが畳の後がついていた

雄「土屋康太こいつがあ有名なムツリー二だ」

Fモブ「馬鹿な・・・奴がそうだというのか？」

Fクラスで・・・？（前書き）

今度は異端審問会です

三人が驚きます

なにがあつたかはお楽しみWWW

Fクラスで・・・？

浩「（ムツツリーニ？聞いたことないな）」

雄「それに姫路については皆知っている通りだ」

Fモブ「そのとうりだ」

Fモブ「姫路さんがいれば最強だ」

雄「木下秀吉もいる」

Fモブ「演劇部のホープ！Aクラスには双子の姉がいたな」

雄「俺も全力を尽くす」

Fモブ「たしか坂本って神童って言われてなかったか？」

浩「（何故Fクラスにはすごいメンバーが揃ってるんだ？

ま、今更人を信じてても意味ないのにな）」

雄「それに吉井明久もいる」

Fクラスが静かになった。

明「雄二何でそこで僕の名前をだすの？なんで僕を睨むの！？静かになったの僕のせいじゃないからね」

雄「明久早速Dクラスに宣戦布告してこい」明「たしか下位戦力の使者ってひどいめにあうよね？」

雄「大丈夫だ俺を信じる」

明「わかった雄二を信じるよ」

――数分後――

明「騙された！！！」

そう叫んで明久が戻ってきた

――屋上で

雄「ちゃんと宣戦布告してきたな」

明「一応今日の午後って言ってきたよ」

必要な事を聞いたから俺は寝た天気晴れ

――数時間後――

俺は雄二に呼ばれた

浩「なんだ雄二何かようか？」

雄「浩樹お前本当の実力隠しているだろ」

浩「何故わかった」

雄「お前が転校してきて受けたテストを見させてもらった」

浩「最低だな」

雄二はだから回復試験を受けてこいと言ってきた試験を受けに行くとき姫路とすれ違った

俺が回復試験を受けてる途中こんな放送が聞こえた

『船越先生、船越先生吉井明久君が体育館裏で待っています生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうですー』

その放送をきいた俺は飽きれた

浩「あほらし」

俺が試験を受け終わると同時に決着が付いたらしい

結果ー！ーFクラス勝利

俺が家に帰ろうとすると

啞「やつほゝひつくん」

浩「げ、あ、啞魅」

啞「げ、とはなによげ、とは」

浩「しつこく付き纏うからだ！それに中学のころ勝手に付き合ってるって噂流したろが！ー！」

啞「イーじゃんべつに同じ高校に入っただんだから」

浩「ったくわかったよ一緒に帰ればいーんだろー！ー」

啞「さすがひつくん！わかつてるゝ」

ー！ー次の日ー！ーFクラスの扉を開けると

F F F 『諸君。ここは何処だ？』

F F F 団 『最後の審判を下す法廷だ！』

F F F 『異端者には？』

F F F 団 『死の鉄槌を！』

F F F 『男とは？』

F F F 団 『愛を捨て、哀に生きるもの！』

FFF『宜しい。これより――F異端審問会を開催する!』
覆面をかぶった奴らがいた。

浩「お前ら何やってんだ?てか仕切ってんの須川だろ」

須「黙れ異端者」

浩「ダメ人間」

須「罪状を読み上げたまえ」

FFF団「は、須川会長。えー、被告、火群浩樹(以下、この者をバンダナとする)は我が文月学園二・Aの嵐丘啞魅(以下この者を僕っ子とする)と一緒にかえったこと――」

須「御託はいい、結論だけ述べたまえ」

FFF団「一緒に帰ってうらやましいであります」

浩「嫉妬かよ」

FFF団「死ね火群浩樹!」

――1分後――

明、雄、秀「これはいったい何事!? (だ) (じゃ) (」

浩「よっ、」

殺人料理そしてBクラス（前書き）

タイトルどおり姫路の料理がでます
Bクラス戦前半です

殺人料理そしてBクラス

雄「浩樹どうしたんだこれは」

浩「いきなり襲ってきたから気絶させたWWW」

その後昼休み俺が屋上でパンをたべると吉井達がきた

明「あ、火群君お昼ご飯それだけ？一緒に弁当食べよ姫路さんの
だけど」

浩「わかった」

明「あッずるいぞムツツリーニッ！！」

バタツガタガタガタムツツリー二がいきなり倒れ震えていた

姫「わわッ土屋君！？」

ム「・・・（ムク、グッ）」

足が震えていて俺にはK O寸前のボクサーに見えた

浩「どうするよ？」

俺は小声で聞いた

雄「おう待たせたな！へー旨そうじゃないか」

明秀浩「「あッ」」

ガン！！ガタガタガタガタ

間違いないこれは本物だ

雄（毒を盛ったな？）明（姫路さんの実力だよ）

俺は逃げようとするが

明「火群君何処にいくの？」

浩「明久、目が怖いぞ！」

明「お前も食え」

そう言つて俺の口に姫路の弁当を入れてきた

浩「モゴッ」

バタツガタガタガタガタガタ

あれ？爺ちゃんがいるそっちにいくよ

浩「おっちゃんこの川渡りたいから舟貸してくれ」

お「6万だよ」

浩「バカ言うな普通は6文と決まって――ハッ」

秀「浩樹よ大丈夫か？」

浩「川の向こう側に死んだ爺ちゃんがいた」

秀「三途の川がみえたのか？」

浩「弁当は？」

秀「明久が雄二の口に全て押し込んだのじゃ」

ふと見るとそこには雄二の死体があった

雄二を復活させBクラスの話に戻した

俺が茶を飲んでいる間に話が決まっていた

浩「明日もテストかめんどいな」

秀「そうゆうでない真面目に頑張ってくれい」

浩「あいよ」

――次の日――

雄「野郎共きつちり死んでこい！」

Fクラス全員『うおおおー！』

雄「目指すはシステムデスクだ」

Bクラス戦俺は前線部隊にいる

Fモブ「いたぞBクラスだ高橋先生を連れてるぞ」

Fクラスが一人また一人と戦死していく

俺もやるか

浩「いくぜFクラス火群浩樹Bクラス岩下に数学勝負を申し込む」

浩、岩「サモン」

数学

Fクラス火群浩樹

541点

V S

Bクラス岩下

189点

Bモブ

151点

B F全員『なんだあの点数は、Aクラス並だぞ』

浩「いくぞ」

そうして召喚獣の小太刀の一振りですぐに同時に戦死にした秀「きをつけるBクラス代表はあの根本らしい」

浩「わかった、一旦俺は教室に戻る」

――Fクラス――

明「これは酷い」

浩「点数にくる嫌がらせだな」

殺人料理そしてBクラス（後書き）

感想などくれると嬉しいです

オリジナルストーリーなどくれるともっと嬉しいです

第五問 B クラス後半（前書き）

B クラス戦の決着です

バカテストを入れましたアイデアがうかんだらバカテストを入れようと思います

少し原作と違いますがお許しください

第五問Bクラス後半

バカテスト

以下の意味を持つ諺を答えなさい

『とくに役に立たないことの例え』

姫路瑞希のこたえ

『ウドの太木』

教師のコメント

正解です。

火群浩樹の答え

『焼け石に水』

教師のコメント

正解です特にコメントはありません

土屋康太の答え

『アスファルトに水』

教師のコメント

打ち水ですか？あれは一応意味がありますよ

吉井明久の答え

『焼けた太木』

教師のコメント

火事が発生します

浩「根本ってやること小さいな」

そういつて俺は自分のちゃぶ台を調べたそしたら

浩「・・・これは！？アハハハ根本、自分がやったことに後悔しな」

そつすると四時までに決着がつかなかったら明日午前九時に持ち越

しその間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する、とのことらしい
秀「とりあえず戻るぞい向こうでも何かされてるかもしれん」
須「吉井ッ！！戻ってきたか」

向こうで須川の声が聞こえた

ちなみに俺はBクラスメンバーの後ろにいた

浩「サモン」

Bモブs「は？」

島田を捕まえていたふたりを補習室送りにした

そしてBクラス前で四時になった

とりあえず俺は教室に戻った

雄二達がCクラスに行くのが見えたため俺もCクラスに行った

根「酷いじゃないかFクラスの皆さん協定を破るなんて」

浩「じゃあなんでBクラスのアンタがここにいるんだ？それも協定を破るのにかわりないぜ」

根「ぐっ」

浩「帰るぞ居心地悪い」

—— 次の日 ——

朝

？「やめてください」

浩「？？？」

チンピラ「いーじゃねーかよべつに」

浩「成る程」

そう言つて俺はチンピラに蹴りをいれた

浩「朝からナンパとは暇なことだ」

愛「ありがとうボクは工藤愛子2-Aクラスに所属してるよ」

浩「2-Fクラス所属火群浩樹だよろしくな」

浩樹サイドアウト

工藤サイドイン

なんたる朝から落ち着かない浩樹君に助けられてから

優「・・・子、愛子」

愛「は、な、何優子？」

優「さつきから呼んでも返事しないから心配しただけ」

咄「ははくん、さては恋ですな愛ちゃん」

愛「こ、恋？」

うーんどうだろ

愛子サイドアウト

浩樹サイドイン

秀「ドアと壁をうまく使うんじゃ！」

戦線を拡大させるでないぞッ！！」

姫路の様子がおかしい

ん、あれは手軽？成る程よし

浩「明久姫路をFクラスに連れていけあと左側出入口口の援護を頼む」

じゃやるか

浩「Fクラス火群浩樹ここにいるやつ全員に数学勝負を申し込む！

！サモン」

数学

Fクラス火群浩樹

402点

V S

Bクラス

157点×15

浩「邪魔だ」

俺は腕輪を発動させた

浩「三爪痕」
トライエッジ

数学

Fクラス火群浩樹

302点

VS

Bクラス

0点×15

浩「さてと後はお前だけだぜ」

根「クソッならばBクラス代表根本恭二火群浩樹に化学勝負を申し込むサモン」

浩「受けてたつサモン」

化学

Fクラス火群浩樹

678点

VS

Bクラス根本恭二

203点

浩「くたばれ」

俺の召喚獣は根本の召喚獣を殴り頭をつかみ地面に5、6回叩きつけた

化学

Fクラス火群浩樹

678点

VS

Bクラス根本恭二

0点

勝者——Fクラス

Fクラス全員『『ヨッシャー』』

雄「さてそれじゃ戦後対談といたかな負け組代表？」

俺は雄二から根本の制服を受けとり手紙を明久に渡した
明「これ僕のじゃないよ」

浩「お前が持つていけ」

さてと帰るかそう思ったら

根「こッこの服やけにスカートが短いぞッ!!」
その光景に俺は吐き気がしたさて帰るか

次はAクラス戦か

第五問 B クラス後半（後書き）

次は A クラス戦です

内容も原作と違います

決戦・Aクラス!!前編

バカテスト

次の意味を持つ諺を答えなさい

「なんの手ごたえもないこと」

姫路瑞希の答え

「糠に釘」

教師のコメント

正解です実行しないように

吉井明久の答え

「鉄人に罽」

坂本雄二の答え

「鉄人に罽」

土屋康太の答え

「鉄人に罽」

木下秀吉の答え

「鉄人に罽」

火群浩樹の答え

「鉄人に罽」

教師のコメント

教師のコメント

あとで5人とも職員室にくるように西村先生が待っています

雄「Aクラス戦だがこれは代表同時の一騎打ちでけりをつけたいと考える教科は日本史小学生レベルの問題だ」

浩「それで勝てるのか？」

明「馬鹿な雄二が霧島さんに勝てるわけが――」

「ヒュン」「トス」

雄「次は耳だ」

雄「雄を信じてくれ神童と言われた力、見せてやる」

姫「あの、霧島さんとな仲が良いんですか？」

雄「アイツとは幼なじみだ」

明「総員狙え」

浩「落ち着け馬鹿共」

そう言つて俺はナイフを投げた

――Aクラス前――

優「一騎打ち？」

雄「ああFクラスはAクラスに一騎打ちを申し込む」

優「何が狙いなの？」

明「システムデスク」

浩「阿保、勝利だ」

優「じゃあこつちから提案一騎打ちではなく五対五で三回勝ったほうの勝ち」

雄「こつちは教科を三回決めさせて貰うそして勝ったほうの言つことをきく」

霧「・・・構わない」

雄「交渉成立だな」

――Aクラス――

高「それでは一人目の方初めてください」

島「じゃ行ってくるね」

優「私の出番かしら」

島「ウチはBクラス並なんだから」

優「あら、私はAクラス並だけど」

数学勝負

Fクラス島田美波

150点

V S

Aクラス木下優子

256点

勝負はすぐに付いた

勝者木下優子

Aクラス1勝

Fクラス0勝

高「二人目お願いします」

浩「いつてくる」

唾「いつてきます」

さつきは島田が決めたから次はAクラスか

高「教科は？」

唾「英語で」

浩唾「「サモン」」

英語

Fクラス火群浩樹

65点

V S

Aクラス嵐丘唾魅

204点

Fクラス「なんだあの火群の点数は」

明「浩樹君、君はAクラス並じゃないの？」浩「ワリ俺英語ダメなんだ」

Fクラス「なにー!？」

俺は唾魅のブーメランに斬られた

浩「ワリ負けた」

勝者嵐丘唾魅

これでAクラス2勝

Fクラス0勝

高「では三人目お願いします」

ム「・・・・・・・・・・（スクツ）」

愛「いつてくるね」

高「教科は？」

ム「・・・・・・・・保健体育」

決戦Aクラス！！後編

愛「へえー保健体育が得意なんだでもボクだってかなり得意だよ？・
・．．．それも実技でね」

ブシャ――

浩「大変だムツツリー二が、てか保健体育の実技ってなんだ」

愛「浩樹君だっけ？保健体育は苦手そうだね」ボクが教えてあげようか？もちろん実技でね」

ブシャ――

高「では始めて下さい」

愛ム「サモン」

明「なんだあのでかい斧は、腕輪まであるし」

愛「バイバイ、ムツツリー二君」

ム「．．．．加速」

ム「．．．．加速終了」

なんだかわからずけりが付いた

保健体育

Fクラス土屋康太

572点

VS

Aクラス工藤愛子

446点

Aクラス3勝

Fクラス1勝

愛「そんなこのボクが」

高「では次の方」

姫「私です」

？「それなら僕が相手しよう」

雄「でたか学年次席」

久保は姫路がFクラスになったため学年次席になった
久姫「サモン」

総合科目

Fクラス姫路瑞希

4409点

VS

Aクラス久保利光

3997点

な、いつの間に

久「どうやってそんなに強くなった」

姫「私このクラスが好きなんですだから頑張れるんです」

Aクラス2勝

Fクラス2勝

高「では最後の一人」

雄「教科は日本史小学生レベルの百点たりの上限ありだ」

A「上限ありだって？それじゃ百点は確実だ」

明「あとは任せたよ」

雄「任された」

ム「・・・(ビツ)」

浩「勝ってこい」

雄「おう」

日本史問題

() 年大化の改新

明「でたってことはFクラスの勝利だ」

Fクラス坂本雄二

53点

VS

Aクラス霧島翔子

97点

F『雄二』

高「Aクラスの勝利です」

雄「殺せ」

翔「約束」

翔「それじゃ雄二私と付き合ってはい？」

雄「お前まだ諦めてなかったのか」

翔「いまからデートに行く」

雄「拒否権は？」

翔「ない」

そういつて霧島は雄二の首根っこを掴んで行った
浩「拗ってらっしゃい」

雄「字が違うぞ！」

優「私の場合は愛子に権利をわたす
はい？」

浩「何言ってるんだ？」

優「言ったでしょ勝ったほうの言うことをきく」

浩「それは霧島がいま——」

優「それは代表、私達は私達」

浩「マジで!？」

咂「じゃあ、(チラッ)康太君私と付き合って」

咂魅はムツリー二を見てから言い放った

ム「・・・俺？」

咂「拒否権はないよデートに行ってください」
ムツリー二も連れ去れるた

残るは工藤愛子だ

愛「浩樹君ボクと付き合って！」

浩「何故俺なんだ？」

— 続きは次回 —

告白そしてその後（前書き）

願い事を言われた後のことです少しオリジナルが入っています

告白そしてその後

愛「だってあの日助けてくれたよね？」

はて、あつたかな？

浩「！！ あの時の！」明「え、何、浩樹君と工藤さんは知り合いだったの？」

浩「知り合いと言うか朝ナンパされてた所を助けたただけだが・・・」

「
F『それじゃー』

Fクラス全員が声を合わせた

明「そういえばなんで唾魅さんはムツッリ二に告白したんだろ？」

浩「Aクラス戦前にアイツが一目惚れしたって言ってた」

明「浩樹君唾魅さんとはどうゆう関係？アイツって言ってるし」

浩「アイツとは幼なじみだ」

俺は雄二が言っていたいい方を真似るすると

明「総員狙え！！」

いきなり構えてきた

浩「いきなりなんだ」

明「黙れ、異端者ここで成敗してくれるこのFクラスメンバーと共に」

浩「ハア、やるかい祭が始まるぜ」

明「祭？祭って？何？」

明久が聞いてきたから俺は答えた

浩「当然、・・・血祭り（ニコツ）」

俺は少し間をおいて言った

F『（ゾクツ）』

浩「さて、話を戻すか、で工藤なんで俺なんだ？」

俺がもう一度きくと

愛「あの時助けられてから君のことしか考えられなかった、だから」

浩「いーぜ、どうせ拒否権はないんだろっし」
愛「ワ〜イじゃあいまからデートに行くから」
浩「な、ちょ、引っ張るな」

――放課後――

浩「どこ行く？」
愛「ン〜映画館」
浩「OK、ん、あれは雄二と霧島？」
翔「学生二枚二回分」
店員「はい、学生一枚と気絶した学生一枚無駄に二回分ですね」
何があつたんだ
浩「あの店員の対応もすごいな、・・・何観るんだ？」
俺がきくと愛子（本人にそう呼ぶように言われた）は
愛「じゃあ、これ」
そう言つて愛子が指差したのは恋愛ドラマの劇場版だった
浩「OK、わかったそれにお前ね分も俺が出すよ」
愛「いいの？」
浩「ああ、大丈夫だじゃ入ろうぜ」
愛「うん」
愛子はかなりご機嫌だった
映画を見終わつたら愛子は泣きかけてた
浩「次はどこ行く？」
愛「じゃあボクン家」
浩「ゲホッゲホッ」
それを聞いて俺はむせた
愛「冗談冗談」じゃあクレープ食べたい浩樹君の奢りで」
浩「はいよ」

そしてラ・ペデイスにて

店員「いらっしやいませ♪」

愛「あれは啞魅っちとムツツリー二君だ」

愛子のその声を聞いてそこを見ると啞魅に『はい、あ〜ん』をさ
れているムツツリー二がいた

浩「よ、大胆だな啞魅」

啞「へへッまあね♪」

ム「浩樹、助けてくれ」

浩「やだ」

ム「ッ！！ 何故？」

放課後デートぱーと2（前書き）

放課後デート編はひとまず終わります

放課後デートぱーと2

浩「だってせっかく唾魅が大胆にして頑張ってるのに邪魔したくないからな」

俺がそう答えてたら

愛「浩樹君早く食べよ」

浩「はいよ」

愛「じゃ、はい、あゝん」

浩「な、なんだ？」

愛「だって恋人さんだからいいじゃん」

浩「わかったよあ、あゝん」

愛「えい」

浩「あ、うまいなこれ」

愛「じゃあはい」

浩「愛子、何故口移しをしようとする……!!」

ム「浩樹お前もきずいたか」

浩「ああ、囲まれてるなさしずめFFF団だろ……愛子、逃げるぞ」

ム「唾魅も」

F須「逃がすな、火群もムツリーニも生け捕りにしろ!!」

FFF団「はっ、須川会長」

その後走り回り人のいない公園に逃げた

F須「フッフ、追い詰めたぞ火群、ムツリーニ

おとなしく死ね」

浩「祭をやるかい？あの日の事忘れて無いよね？」

俺がきくと

FFF団&ム「ガタガタブルブル」

全員が震えていた

浩「愛子行くか」

ム「俺達も」

浩「愛子」

愛「何？」

浩「ティッシュ持ってるか？」

愛「ない」

「FFF団がどうなったかは皆様の想像にお任せします」

放課後デートぱーと2（後書き）

次は学園祭編が始まります

きたぜ初の学園祭（前書き）

JOKER「始めました学園祭編」

浩「投稿遅くないか」

JOKER「ネタがイマイチ思いつかなくて」

浩「ところで作者」

JOKER「なんだ？」

浩「俺のモデルはお前なのか？」

JOKER「そうだが、俺が疑心暗鬼だからお前も疑心暗鬼にした」

浩「だが大分甘いようだが」

JOKER「本編をどうぞ」

浩「ここらごまかすな」

きたぜ初の学園祭

ここ文月学園は文化祭が始まろうとしていたほとんどのクラスが準備をしている中Fクラスは――

須「こい吉井お前の球なんか場外にしてやる」

明「言つたな打たせるもんか」

――野球をしていた

雄（カーブをバッターの頭に）

明「それ反則じゃないの？」

鉄「貴様ら何をしてるか、クラスの出し物が決まってないのはウチのクラスだけだぞ、吉井貴様が主犯か」

明「違いますなんで僕を目の仇にするんですか!？」

雄（フォークを鉄人の股間に）

明「それは鉄人を怒らせるだけだ」

所変わってFクラス

雄「さて清涼祭の出し物を決めるんだが実行委員を選び、そいつに全権を委ねるので後は任せる」

雄「そうだな浩樹頼めるか？」

浩「構わない、ただ――」

雄「ただ？」

浩「――皆が吐くぐらいの仕事になるが」

雄「島田任せる」

島「え、ウチ？ウチは召喚大会に出るからちょっと困るかな」

明「雄二　実行委員なら姫路さんの方が適任なんじゃないの？」姫
「私ですか？」

雄「姫路には無理だな全員の意見を丁寧聞いてる間に時間切れになる」

島「それにねアキ瑞希も大会に出るのよ」

遠くで島田と姫路と明久が話していると

雄「三人ともこつちの話を続けていいか？」

じゃあサポートに副実行委員を選出しようそれなら良いだろ」

雄「じゃあ皆に候補を挙げてもらい島田が二人選んで決戦投票でいいな」

F「やはり坂本じゃないか」

F「いやここは須川だろ」

F「姫路さんと結婚したい」

姫路にラブコールしてる奴を見つけるかな後で

候補1 吉井

候補2 明久

同一人物だな

明「ねえ雄二明らかにおかしくない」

浩「明久」

明「浩樹君助けてくれるの」

浩「人を信じるな」

明「たしかに」

島「なにかやりたいものがある？
はい土屋」

ム「・・・写真館」

島「危険な予感がするんだけど」
否定できない

候補1 写真館へ秘密の覗き部屋」

その名前が駄目なんじゃ

島「はい横溝」

横「ウェディング喫茶なんてどうだ」

ム「・・・結婚は人生の墓場」

候補2 ウエディング喫茶へ人生の墓場」

もうツツコミたくない

須「俺は中華喫茶を提案する」

島「チャイナドレスでも着せようっていうの？」

須「いや違う」

俺がやりたいのは本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だイロモノ的な——（以下略）」

候補3 中華喫茶へヨーロピアン」

鉄「皆清涼祭の出し物は決まったか？」

鉄人が入ってきて黒板を見るなり

鉄「・・・補習の時間を増やしたほうがいいかもしれんな」

鉄「稼ぎを出して設備を向上させようとか思わんのか」

浩「いいのかそんなこととして」

鉄「学園長の許可はおりてる」

姫「皆さん頑張りましょう」

そつゆうとFクラスのメンバーが勝手に意見を出していた

はあ

浩「ダメ人間共！」

俺の叫び声でクラスは静かになった、てまかかすな

島「じゃあこの三つの中から選んで

はいFクラスの出し物は中華喫茶に決定」

須&ム「それならお茶と飲茶は俺が引き受ける（・・・スクツ）」

明「ムツツリー二料理できるの？」

ム「・・・紳士の嗜み」

浩「そうだ島田俺は餃子、炒飯、肉まん、ラーメン、北京ダック程度なら作れるぞ」

島「それだけ作れる時点で程度とは言わないわよ

とりあえず厨房とホールに別れて厨房は須川と火群と土屋の所
ホールはアキの所に集まって」

姫「それじゃ私は厨房に――」

明「秀&浩&ム」「」「姫路はホールじゃないと駄目だ」「」

奥で雄二が震えているのはきのせいではないだろう

その後明久が姫路に理由を聞かれ馬鹿をやって島田にボコボコにさ
れたのは言うまでもないだろう

明久SIDE

島「アキちよつといい？」

明「なんかよう？」

島「用つていうか相談なんだけど」

島「その、やっぱり坂本を引つ張り出せない？」

明「うーんどうだろ雄二は興味がない事には無関心だからね」

浩樹SIDE

俺は忘れ物とりにFクラスに戻ると秀吉が顔を赤くしていたなに
やってんだか

浩「明久、今度はなにやったんだ？」

明「人聞きの悪いこと言わないで」

浩「冗談はさておき、なにがあつた」

島「実はこのままじゃ瑞が転校しそうなのよ」

なに

SIDEEND

きたぜ初の学園祭（後書き）

今回は番外編で浩樹の疑心暗鬼になった理由をかこうと思います
当然明久や雄二もです

番外編疑心暗鬼の過去（前書き）

予告通り番外編になります

番外編 疑心暗鬼の過去

清涼祭準備中のFクラスにて

明「そういえばさあ浩樹君はなんで疑心暗鬼になったの
そういえば一年のときは誰とも話してないよね」

雄「そういえばそうだな」

浩「話せばいいんだろ、あれは10年前の日の出来事だった」

明「重そうな話だね」

雄「たしかにな10年前ってことは7歳か」

浩「俺は友達と遊んでいて一人帰るのが遅かったんだ」

—— 10年前 ——

火群浩樹当時7歳

浩「ヤバイ遅くなっちゃった急ご

ただい……ま」

え、なんで？なんで親戚のおじさんがいるの

あれ？あれは父さんに母さんなんで血まみれで倒れてんの？兄ちゃん、姉ちゃんも震えてるし、なにがどうなってんの？

親戚男A「どうすんだこのガキ共？」

親戚男B「この家の金目のものをとればいいからな殺せ」

！！え、殺す？なんで？おじさん達はあんなに優しくったのに

浩「や、やめろ」

姉「駄目なんででてきたの」

親戚男A「まあいいお前は目の前で家族が死ぬのを拝めてな」

浩「おじさんなんでこんなことするの？前は優しくったよね？」

親戚男A「バーカそれは演技だよ」

浩「！！、なんでそんなこと」

親戚男A「この家には金になりそうな物が多いからな」

親戚男B「三人目」

浩「な、や、やめて」

親戚男A「ケケケどうだ辛いかな？」

浩「貴様、よくも、これでもくらえ」

俺は男の鳩尾に蹴りを入れた

親戚男A「が、」

浩「後はデメーだけだ」

親戚男B「ちっ、まあいいこの女を殺す」

浩「くっ、やめろ」

ぐああああ

親戚男B「ちっ女を庇ったかまあいいどのみち死ぬだけだ
ふ、じゃ金は貰っていくぜ」

浩「いてー、はっそうだ皆、痛っ、そうだ救急車もしもし救急車お
願います」

—— 現在 ——

浩「で119番通報して俺達家族は病院に運ばれた。

そして・・・」

雄「お前だけ助かった・・・と、」

浩「そうゆうことだ」

明「それはまた」

浩「あの日から毎日夢に出るんだ目の前で人が殺される所、そして
皆がお前だけ助かりやがって、って」

明「浩樹君は親戚の家で暮らさなかったの？」

浩「ああ親戚に騙されてたからな誰も信じないで今まで過こしてき
た」

秀&姫&優&ム&翔&愛&島「・・・・・・・・・・・・・・・・」
ダー・・・・・・・・・・」

浩「な、お前らいつの間に」

俺が後ろを見ると秀吉達が泣いていた

浩「なぜ泣いてるんだ」

愛「そんなことがあったんだ」

浩「もう昔のことだ」

愛「それで悪夢は今でも見るの？」

浩「ああ」

愛「うーんどうしようか」

番外編 疑心暗鬼の過去（後書き）

番外編いかがでしたかこの作品の悪夢などの解決はしばらく後になります

第？問姫路の転校を阻止せよ（前書き）

タイトルをRPG風にしましたWWW

第？問姫路の転校を阻止せよ

浩「なんで姫路が転校しそうなんだ？」

秀「マズい明久が処理落ちしかけるとぞ」

島「このばか不測の事態に弱いんだから」

ヤレヤレ

秀「明久目を覚ますのじゃ」

秀吉は明久をふっていた

明「秀吉・・・モヒカンになった僕でも好きでいてくれるかい？」

浩「何をどうしたらそうなる

ところで島田なぜ姫路が転校するのと喫茶店が繋がるんだ？」

島「瑞希の転校理由が『Fクラスの環境』なのよ」

浩「あ、これは無理だな」

明&秀&島「・・・諦め早っ」

浩「つまり姫路は身体が弱いからこのままじゃ駄目って事か

明久、秀吉雄二捕獲作戦だ」

明久電話中

島「坂本はなんて？」

浩「どうせ霧島から逃げているんだろアイツは異性に弱いからな」

浩樹SIDEEND

明久SIDESTART

明「やあ雄二奇遇だね」

雄「女子更衣室で会う偶然を教えてください」

ちなみに浩樹君達は盗聴している

【ガチャ】

優「あれ？バカコンビここ女子更衣室だよね

先生覗きです！」

ヤバイ鉄人だ

明久SIDEEND

浩樹SIDESTART

あのばかりじゃないフォローするか

浩「西村先生吉井は坂本に出し物に協力してもらったためにいたんです、ちなみに坂本は霧島の下着姿が見たくて忍び込んでました」

雄「貴様!!」

鉄「わかったそうゆうことなら見逃してやる」

浩「謝謝

さて坂本貴様に中華喫茶を手伝ってもら——「断る」断ったら霧島に温泉旅行ペアチケットをわたす」

雄「わかった協力しよう」

浩「交渉完了」

明「それは脅迫だよ」

浩「終わり良ければ全て良し」

次回に続く

交渉、そして、召喚大会前半（前書き）

学園祭一日目

かなりクレームへの対応が変わります

交渉、そして、召喚大会前半

俺は細かいことは苦手なためFクラスの外にいた

雄「浩樹行くぞ」

浩「学園長室だろ、あのババアは苦手なんだよな」

学園長室前

「・・・賞品の・・・として隠し・・・」

明「話中みたい」

雄「むだ足にならなくてなによりだ」

コンコン

雄「失礼しまーす」

学「全く失礼なガキだねえ」

浩「ふぁゝあ、どうでもいいが用を済まそうぜ」

雄「俺は二丁F代表坂本雄二、こっちが学年を代表するバカと、そして疑心暗鬼な高校生です」

学「なるほどその二人が吉井と火群かい」

気が変わったよ話を聞こうか」

明&浩「ちょいまち俺（僕）は名乗ってない」

まあいいけど

雄「Fクラスの設備についてです、今のFクラスの教室は学園長の頭の中のようにボロボロですので体を壊す生徒が出る前に直せやクソババア、というワケです」

学「却下だね」

明「ねえこのババアコンクリに詰めて捨てよう」

浩「やめる明久、こんなのが捨ててあつたら食った鳥が死んじゃうまあいい理由教えるババア

交渉は任せた俺は適当に聞きながらいるわ」

交渉終了

浩「秀吉、このクロスどうしたんだ？」

秀「演劇部のじゃ」

鉄「火群、衛生面は大丈夫だ」

浩「謝謝（シェシェ（ありがとう））」

さてと確認書をはるかよし

「んゴバツ」×2

なんだ？

浩「どした？姫路のだな？」

ム「・・・（コクコク）」

浩「雄明ラーメンでも食え」

雄明「いただきます

ごちそうさま」

浩「で？大会でんのか？」

雄「ああ」

浩「ムツツリー二、組もうぜ」

ム「わかった」

召喚大会

浩「ムツツリー二相手は？」

まあ楽か」

30秒後

浩「帰るか」

【ラーメン一丁、三番テーブルラーメンセツト、五番テーブル北京ダックお願いします】

？「なんだこの料理マズ、てかこの設備で喫茶店やるのかよ」
クレームかわざとらしい

浩「お客様、なにがご不満でも？」

設備に関しては西村先生に調べてもらい問題はないそうです、お客様、この料理はまずいでしょうか？

気を悪くされたなら皆様に無料で北京ダックを用意いたします」

客「この料理がマズいなんて味覚がおかしいよ」

客「本当」

浩「皆様ありがとうございます。（涙目）
では北京ダックをここで調理いたします」

明「浩樹君どうしたの」

明久が帰ってくるなり尋ねてきた

浩「クレーム、だから気を悪くされたお客様に料理を無料で用意している

お待たせしました、それではごゆっくりどうぞ」

明「（秀吉、浩樹君で、あんなキャラだっけ？）」

秀「浩樹よ、ぜひ演劇部へ！！」

秀吉が近づくなりこの一言

客「すいません」

浩「秀吉、接客、この喫茶店が成功したら入る」

秀「ほんとかの？、はいただいま」

雄「よお、大分いいな」

明「呑気だなクレームがあつたのに「お前もいなかったろが」」

雄「しかしこのテーブルで大丈夫か？」

浩「ぬかりはない」

俺は雄二に鉄人の確認書を見せた

雄「なるほど、でかした、しかし何故秀吉はあんなに張り切ってるんだ」

雄二にこれまでのことを説明中

雄「なるほどな」

浩「時間か、ムツッリー二行くぞ」

二回戦、40秒後

浩「帰るか」

後半に続く

交渉、そして、召喚大会前半（後書き）

次回も原作から少しずれます

そして葉月もです

交渉そして召喚大会後半（前書き）

バカテストアンケート

喫茶店を経営するときウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？【？可愛らしさ？優しさ？行動力？その他（ ）またその時のリーダーの候補を挙げて下さい

土屋康太の答え

？可愛らしさ候補・・・姫路瑞希&島田美波

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね

吉井明久の答え

？可愛らしさ候補・・・姫路瑞希訂正、木下秀吉訂正、島田美波

教師のコメント

用紙についてる血痕が気になるそうです

火群浩樹のコメント

島田、暴力を振るうと明久に嫌われるぞ

坂本雄二の答え

？その他（結婚相手）候補・・・霧島翔子

火群浩樹の答え

？その他（結婚相手）候補・・・工藤愛子

教師のコメント

なぜ二人の用紙をAクラスの霧島さんと工藤さんが持ってきてくれたのでしょうか

交渉そして召喚大会後半

浩「景気はどうだい？」

F「まあまあただ客が少し減っている」

？「ちびっ子じゃないです、葉月です」

雄二が戻ってきた

雄「搜してるのはどんなのだ？」

F「坂本、妹か？」

F「可愛いね、五年後付き合わない？」

F「俺はむしろいま付き合いたい」

だれだロリコン発言したの

浩「雄二、ロリコンに目覚めたか？」

俺は雄二をからかった

雄「違う、で、名前はわかるか？」

葉「名前はわかりません、ただ、すっごくバカなお兄ちゃんでした、

「「「吉井だな」「」」」

息ぴったし

浩「明久、ロリコンに目覚めたか」

明「違う」

葉「葉月と結婚の約束をしたのに」

確定、明久はロリコン

島「瑞希」

姫「美波ちゃん」

姫島「「殺るわよ」「」

島「瑞希そのまま真後ろに振って、ウチは膝をやるわ」
はあ

浩「静かにしろ」

俺は二人をつまみあげた

おまえらちよっとこい、ついでに秀吉も」

秀「ワシもか」

空き教室

浩「二人ともちよつとそこ座れ」

島「なによ火群、今からアキをお仕置きしないといけないんだから」

姫「そうです邪魔しないで下さい」

駄目だこいつらFクラスに染まったな

浩「お前ら明久のこと好きなんだろ？」

それなのに暴力を振るって、明久がお前らに振り向くと思うか？、

だったら暴力をしない秀吉のほうが明久に好かれると思うが？「ワ

シは男じゃ」だが秀吉お前もまんざらじゃないんじゃないか明久に

なにか言われて顔を赤くしていたし」

秀「それはその」

素直じゃないね」

浩「ほれ戻るぞ」

後で博士に作って貰うか

Fクラス前

浩「明久なにしてんだ？」

明「じつはね」

これまでの事説明中

浩「わかった俺も行く、お前らじゃ不安だ」

Aクラス前

雄「ここはやめよう」

浩「駄目………ムツツリー二何してんだ？」

ム「………人違い」

ハア

浩「ほれ入るぞ、姫路、明久が写真見ただけでつねるな、明久の自

由だろ、人権だ」

姫「はい………」

翔「………お帰りなさいませお嬢様にご主人様」

浩「霧島、あの店の名前はないだろ」

まあいいけど

翔「……お帰りなさいませ今夜は帰らせませんダーリン」

スゴイアレンジされてる、霧島は大胆だなWWW

ちなみに注文は女子三人がふわふわシフォンケーキ、明久が水、それって無料だろ、俺がホットケーキ、雄二が

翔「メイドとの婚姻届、以上でよろしいですか？」

ちなみに霧島がおいたはんこは本物らしい雄二も苦労するな

交渉そして召喚大会後半（後書き）

すいません説教が長くなり召喚大会がでませんでした

キャラ紹介&さい編成（前書き）

火群浩樹の書き足しと新キャラ紹介
まだ増やすつもりです

キャラ紹介&さい編成

修正&書き足し

火群浩樹

2・Fクラス所属

身長、体重、165cm、47kg

つねにバンダナを付けている、目のいろは白目の部分が黒、黒目の部分が赤となっている、ちなみに顔はISのシャルロット・デュノアを男にした感じ、Fクラスに女扱いされないのは、浩樹が女扱いしたら殺すと脅したからである（ちなみにこれは一話での書き忘れ）
マルチウエボン
訂正腕輪の能力は多装備

新キャラ（全ては言わない）

笠野博士（本名は笠野夏樹）45歳

身長、体重170cm、65kg

浩樹が信用している数少ない人間

見た目は太り気味の眼鏡姿

嫌な奴とは O H A N A S I よ (前書き)

原作とは代わりますさらわれた場所もカラオケボックスから廃ビルになります

嫌な奴とはO H A N A S I よ

愛「代表、注文に変更、ホットケーキをメイドとの新婚生活に変え
といて

はい、浩樹君の♪」

おれの前にも印鑑がおかれた

浩「おい、これも俺の実印だぞいつの間に入手した？」

翔&愛「「メイドとの新生活を想像しながらお待ち下さい」」

ハア、しょうがない新生活でも想像すつか

A「お帰りなさいませご主人様」

？「二人だ中央の席空いてるか？」

ん、あれは

？1「にしてもここは綺麗だよな」

？2「全くテーブルには虫がわいていたからな」

ほぉーいい度胸だ

明「雄二はやくしないと」

雄「姫路、身嗜みを整える物ないか？あつたら貸してくれ、おい翔

子「なに？」予備のメイド服二着ないか？貸してくれ」

数分後

翔「お待たせ」

雄「サンキュー」

翔「貸しイチ」

雄「だそうだ」

明「じゃあ一日雄二を自由にしていよいよ」

浩「俺からは、映画ペアチケット」

翔「・・・・・・ありがとう吉井と火群はいいひと」

浩「で、誰が着るんだ？」

明「だってさ姫路さん」

雄「違う姫路じゃ攻撃できない」それでもなかったりする

明「じゃあ美波？でも美波だと胸があま——」

島「ツギハ、ホンキデウツ」

殺気ビンビン普通なら止めるが自業自得だから止めない

雄「着るのは明久と浩樹だ」

明「いやあああああああ！！」

浩「しゃーない」

男子トイレ

秀「出来たぞい

ワシは戻るがしつかりと悪を粉碎するのじゃ」

明「お客様、床を掃除させていただきます」

あ、こいつら常夏コンビだ

常「へえーこんな子もいたんだ」

夏「早くしてくれよ」

明&浩「では早速……死にくされや」

明久は常村先輩に俺は夏川先輩に明久はバックドロップ、俺はアルゼンチンバックブリーガーを喰らわせた

夏「てめえはFクラスの吉井に火群！まさか女装趣味が」

緊急奥義

浩「こ、この人私の胸を触りました」

客「何~~~~」

あれ？ここは雄二が出てくるはず、まあいいか

ちなみに常夏コンビは、さっきの客達に追いかけていた

雄「……戻るぞ」

浩「試合があるから、じゃな行くぞムツツリー二、ってムツツリー

二、大丈夫か？」

ム「死して尚、一片の悔いなし」

ムツツリー二が死に欠けてる何故？

雄「自分の格好を覚えてみる」

自分の格好？

浩「俺メイド服じゃん！はず！

まあいいや大会行くぞムツツリー二」

ム「・・・・・・了解」

確か次は三回戦、教科は、保険体育、

浩「ムツツリー二、5分でけりをつける」

ム「・・・・・・違う、30秒」

会場、は客で満員だった、三回戦からは客もいるんだ

浩「先生、「何ですか？」マイク貸して下さい、皆さん、俺はこんな格好をしていますですがこれは成り行きからですちなみに男です」

客達『『嘘だ！』『』』

ひぐらしかよ

保険体育

2-Fクラス

火群浩樹&土屋康太

250点&568点

VS

3-Dクラス

秋山聖架&栗谷苑佳

154点&200点

30秒後

浩「ムツツリー二のいった通りだな」

Fクラス

なんだこれ

浩「須川どうしたんだ!？」

ちなみに服は着替えた今は制服

須「すまない、ウェイトレスがさらわれた、あとAクラスの工藤さんと唾魅さんもさらわれた」

ブチッ

浩「須川、奴らは今、ドコニ？」

須「（ビクッ）すまないわからない」

明「どうしたの?これは」

明久と雄二も帰ってきた

ム「ウエイトレスがさらわれた」

明「何だって!？」

ム「こうゆう時のため、姫路には発信機を持って貰っていた、盗聴も出来る」

浩「ムツツリー二、場所八？」

ム「・・・（ゾクツ）近くの廃ビル」

浩「OK、すごいこ」

雄「ましてっかり考えてから——」「邪魔をするの?」

「（ビクツ）いや、ちゃんと作戦を考えてから——」「作戦はいらない」

雄「わかった、ただし危なくなったらバックアップするからな」

浩「わかった」

嫌な奴とは O H A N A S I よ（後書き）

次回主人公の二ツ名がわかります

おまえらをユルサナイ（前書き）

とりあえず学園祭一日目終了です、ちなみに大会は二日目に準決勝、決勝とします、原作が大分崩れてますWWW

おまえらをユルサナイ

近くの廃ビル

浩「ここか」

俺はラジオらしき物から中の様子をきく

姫「やめて下さい、葉月ちゃんと私達を解放して下さい」

不1「それはオネーちゃんたちのがんばり次第かな」

不2「それにしても、黄緑色髪の女、うるさかったから一発殴った
ら気絶しちゃった」

不3「この黄緑色の髪の女綺麗だな、今のうちに犯るか」

不「『『『賛成』』』」

ふむ、声からすると相手の数は10人以上

愛「な、え、なに？、ちょっと、やめて」

ブチッ

浩「俺は行く」(ゴゴゴゴゴ)

浩樹SIDE OUT

雄二SIDE IN

浩「俺は行く」(ゴゴゴゴゴ)

なんだこの浩樹のオーラは、やばいだが止めれば俺が殺される
雄「わ、わかった行つてこい」

俺は道を譲ることしかできなかった

雄二SIDE OUT

浩樹SIDE IN

浩「お邪魔しまーす」

不「誰だデメエ」

この声、愛子を殴ったやつか

浩「皆、目隠しや耳栓を持って来なくて悪い

今から俺は一昔前の俺になる、怖いならドアからでろ」

だが誰も動かなかった、腰が抜けてるらしい

浩「島田、せめて葉月の目を塞いでくれ」

島「わかった」

浩「さてと皆様、よくまあ俺の大切な愛子を殴り、一生の傷をつけようとしたな、死んで償え!!」

俺は何処からともなくデカイ鎌を構えた（hack / G・U・のスキースの鎌と同じ）

浩「喰らえ、アブソリュート」

俺は鎌を回し自分も回転しながら不良どもに切り掛かった

不4「この動き、もしかして、バンドラボックス悪魔の箱!？」

不「この技、まさか蒼炎の悪魔!そうえんのあくま!？」

不「この鎌、もしかして死の恐怖」

不「昔、暴走族をたった一人で潰した、あの!？」

浩「懐かしい名だ」

そうこの名は中学二年のころつけられたあだ名だ

浩「さて、その死の恐怖の大切な物、初めて信用しようとした人をきづつけた、くたばりやがれ!!」

ちっ、数が多いな」

もう10人くらい倒したはずだがまだいる

雄「だから、慎重に動けといったんだ」

不「でた坂本だ」

不「コイツが悪鬼羅刹の」浩&雄「さてと、生まれてきたことを後悔させてやる」1時間後

浩「すまない愛子、お前をこんな目に合わせて」

愛「気にしないで、浩樹君ならきてくれると信じてたから」

うれしいことを言ってくれる

雄「それにしても、あの三つの二ツ名が全て同じだとは、俺は違う奴らかと思っていた」

浩「とりあえず学園に帰ろう」

2-Fクラス

浩「雄二、誰を待っているんだ？」

雄「ババアだ」

明「ババアって学園長！？、駄目だよ雄二、相手は一応年上なんだから」

雄「この妨害の原因があこのババアにあるはずだからな事情を説明させないと気が済まん」

浩「ソレハホントカ？」

明「浩樹落ち着いて

それで雄二あのババアが僕らに何か隠してたのか

学「わざわざきてやったのに「クタバレ妖怪ババア」うわっと、随分とご挨拶だねえガキども

何で、工藤や嵐丘がいるんだい？」

雄「こいつらも被害者なんだ、原因の顔を見せたくてな」

雄二達は今妖怪ババアと何かを話してる、俺は雄二にどっちかが優勝しても大丈夫なようにするらしいから大丈夫だと言われた

浩「さてと、帰ろうか愛子、ムッツリー二は啞魅をよろしく

ム「・・・任せろ」

俺は愛子を家まで送ってから帰った、ちなみに愛子の家と俺の家は意外と近かった

決勝戦、人は人の屍を踏んで勝ち上がる（前書き）

二日目です

更新が遅くなつてすいませんm（| |）m

決勝戦、人は人の屍を踏んで勝ち上がる

二日目俺は朝、愛子を家まで迎えに行った、あれは愛「だからひとを待っているんです。」

男「だからそんな男をほつといて俺と遊びに行こー」
浩「邪魔」

俺は、ナンパ男を蹴り飛ばし、愛子と合流した

浩「行こうぜ愛子」うん」

文月学園

浩「おう」

雄「どうだった？」

浩「愛子が朝からナンパされてた」

雄「明久とムツツリー二はどうだった？」

明&康「問題無し」

そして、俺の初の学園祭は二目を迎えた

雄「明久準決勝だ行くぞ」

明久「わかった」

さて、明久が大会に行っている間にイロイロ作るか
ガラッ

秀「いらっしやいませ」ヨーロッパへようこそ、何名様ですか？」

客「三人です」

秀「わかりました席にご案内いたします」

ガラッ

須「いらっしやいませ何名様ですか？」

客「二人だよ」

この声は愛子か

愛「ヤッホー」

客「すいません、ラーメンセットを一つ、北京ダックを一つ、ラー

メン半チャーハンセット餃子付き一つ」

一人、スゴイマニアックの頼みかたしたなWWW

愛「こつちも注文いい？」

秀「はい」

愛「じゃあ、ジャンボラーメン醤油味を一つと北京ダックを一つ、あと火群浩樹君を一人、以上で」

秀「かしこまりました」

かしこまるな秀吉

須「お待たせしました、こちら、ラーメン半チャーハンセット餃子付きです」

秀「お待たせしましたこちらラーメンセットと北京ダックです」

浩「お待たせしましたこちら、ジャンボラーメン醤油味と北京ダックですついでに火群浩樹です」

愛&啞「いただきます」「」

明「ただいま」

明久が戻ってきた、そろそろ時間だな、対戦相手を確認しとくか対戦相手常夏コンビ

浩「康太行くぞ」

明久店よろしく」

康「・・・・わかった」

愛「いつてらっしゃいアナタ」

浩「ゲホッゲホッ」

こいつはいきなりなにいいやがる

啞「いつてらっしゃいダーリン」

康「・・・・（ブシュー）」

やばい康太がグロッキーだ

浩「康太、輸血パック」

康「助かる」

会場

浩「相手は常夏コンビだ、康太あいつらを惨めに殺すぞ」

夏「よう、テメエらが恥かかないようにしてやったのによ」

浩「そんなことはどうでもいい、おまえらが教頭に協力している理由はなんだ？」

常「事情はわかっている訳だな

進学だよ上手くすれば推薦状を書いてくれるらしい夏川も同じだ」

浩「なるほどそうか」

こいつらは俺の初の学園祭をぶち壊し、大切なひとを傷付けようとした、だから俺は

浩「おまえらを許さないおまえらは俺一人で倒してやる！！、康太

おまえは召喚しなくていい」

夏「舐めんじゃねーぞ」

常夏「「サモン」」

化学

Aクラス

常村勇作&夏川俊平

209点&197点

夏「どうした、いきなり黙って、俺達の点数をみてびひったか」

常「そうゆうなFクラスでは見れない点数だからな」

浩「その程度か

サモン」

化学

Fクラス

火群浩樹

700点

常夏「な、何ー」

浩「何びひってんですか？その程度の点数でいいならAクラスはこれぐらい普通でしょ？」

夏「テメエ」

浩「ちなみにこの点数は出来がイマイチだ」

常「マジかよ」

あの二人の引き攣った顔傑作だな

11秒後

浩「先輩方弱いですね、俺に恥かかせる所か自分が恥かいて、散々威張った割には秒殺でしたね」

ちなみに俺は無傷で勝った

康「・・・このまま決勝をやる」

マジ！？

司「それでは皆様お待たせしましたただいまから決勝戦を始めます、選手の入場です

まずはたった今、一人で三年を秒殺した二年Fクラス所属

火群浩樹君と土屋康太君、対するは二年Fクラス所属、

坂本雄二君と吉井明久君、拍手で迎えましょうこの二ペアはどちらもFクラス所属、これはFクラスの認識を改める必要があります」

あの司会ありがたいことゆうな

雄「さあ、やろうぜ」

明、雄、浩、康「」「」「サモン」「」

日本史

Fクラス

坂本雄二&吉井明久

215点&166点

VS

Fクラス

火群浩樹&土屋康太

412点&105点

浩「おまえら点数高いな」

明「浩樹君には敵わないけどね」

勝負は雄二対俺、明久対康太だ

雄「行くぞ浩樹」

浩「かかってこいや」

雄二の召喚獣と俺の召喚獣が激突しあう

浩「腕輪発動、マルチウエポン」

腕輪が光り、俺の三つ又の小太刀が消え現れたのは

浩「雪片式型かあ、よし行くぜ発動、零落白夜」

Fクラス火群浩樹

305点

浩「喰らえ雄二」

雄「喰らうか」

浩「甘い！」

俺は雄二の召喚獣をあしばらいして雪片式型で切り掛かった

雄「なんのこれでも喰らえ」

浩「喰らうか」

【ガキン、ガキッ】

俺と雄二の攻防は30分以上続いている

決勝戦、人は人の屍を踏んで勝ち上がる（後書き）

次回、ついに決着がつきます
そして打ち上げ

決着、そして、打ち上げ（前書き）

更新しました

少し他のひとの小説に似ちゃっているかも知れませんが、そうだったら
すいません

m ((m

決着、そして、打ち上げ

俺と雄二の攻防は続き

Fクラス坂本雄二

69点

Fクラス火群浩樹

88点

ヤバイな零落白夜は強力だが少しずつ点数が減る、持久戦は不利だ

雄「明久大丈夫か？」

浩「康太、無事か？」

明「ゴメンやられた」

康「・・・俺も」

雄&浩「（相打ちか）」

雄「ならば」

雄&浩「この一撃にかける！！」

雄「オラア」

俺は雄二の右ストレートを避け、雪片弐型を雄二の召喚獣に突き刺した

Fクラス坂本雄二

0点

Fクラス火群浩樹

9点

司「勝者！！火群、土屋ペア！！」

【ワアアアアアアアッ】

浩「よっしゃー」

司「では今から表彰式を始めます」

学「てなわけでデモンストレーションをするよ」

雄「行くぜ起動ハアウェイクン」

雄二ね始動ワードによりフィールドが展開された
フィールド英語

明、康、浩「」「サモン」」

明「行くよ二重召喚へダブル」

吉井明久英語

15点×2

今度は明久の始動ワードにより明久の召喚獣が増えた

康「・・・・次は俺透明化へステルス」

そして康太の始動ワードにより康太の召喚獣が消えたと言うよりも
見えなくなつた

浩「次は俺だな二重能力へデュアルアビリティ」

腕輪発動錬装士へマルチウエポン」

次は、雪片式型へゆきひらにがた」と雪羅へせつら」か二つ同時か、
いいなこれ」

学「これでデモンストレーションを終了します」

Fクラス

浩「雄二、霧島から伝言、AクラスとFクラスが合同で打ち上げを
したいからこの公園に集合、だそうだ」

雄「・・・・わかつた」

浩「お先に」

俺が校門を出ようとすると

秀「浩樹よここに常夏コンビが来なかったか？」

浩「見てないが、どうした？てか着替えてないのかよ」

康「・・・・学園存亡の危機」

浩「常夏を捜せばいいんだな？」

秀「うむ」

さてと俺は秀吉と別れ常夏を捜し出していた

姫「あの火群君、明久君見ませんでした？約束したのに」

浩「見てないが、約束、か、あいつなら今戦っている、おまえのた
めにおまえを転校させない為に」

姫「え？」

約束、か、まあいい屋上にいけばわかるだろ
ピピッ

ふと、俺のケータイが鳴る

浩「明久かどうした？」

明「浩樹君今どこ？」

浩「屋上に行く階段だが」

明「ちようどよかった、そこに常夏コンビがいるから、放送機具」と壊して」

浩「わかった

先輩、何しているんですか？」

常「火群か今から面白い放送するのさ」

俺は無言でRPG-7を取り出した

夏「んなもの何処から」

浩「ROCK、破壊

明久、破壊完了先行っているぞ」

明「了解」

俺はその後すぐに公園にいかず近所の研究所に行った

浩「博士、頼んだ薬出来てる？」

博「できとるよ、しかし何故？」

浩「ダチのため、じゃ駄目か？」

博「ほれ、一粒飲めば性転換出来るぞ」

浩「あんがと」

俺は公園に向かった

浩「おつす、秀吉、話があるちょっとこい」

秀「なんじゃ？」

浩「秀吉、これをやる」

俺は秀吉に薬の入った袋を渡した

秀「これはなんじゃ？」

浩「性転換薬だ」

秀「何故おぬしが？」

浩「知り合いの博士に作ってもらった、一粒飲めばいい、するかしないかは自由だしたら、市役所に行って性転換したことをいえばいい」

秀「わかった、考えておこう」

あとは

浩「愛子、雄二、霧島、木下姉話がある」

愛「何？」

浩「実は俺は今秀吉に性転換薬を渡した」

翔「……なんでそんなものを？」

浩「知り合いの博士に頼んだ」

話と言うのはあいつは必ず性転換する、そして明久に告白すると思うだから皆、得に木下姉、あいつの背中を押してやれ」

優「なんで私が、嫌よ」

浩「だが、あいつは悩んでいる、そうゆう時、あいつの味方になってくれ、そうすればあいつも安心出来る、頼む」

優「わかったわ」

浩「ありがたい」

秀吉の決意、そして、祝福の鐘になる（前書き）

更新のペースが曖昧ですいません
少しメンバーの性格、変わっているかも

秀吉の決意、そして、祝福の鐘がなる

雄「俺達関係ないんじゃない」

浩「いやおまえらも秀吉の支えになってくれ」

雄「わかった」

浩「助かるよ」

翔「……浩樹、後でその博士紹介して」

浩「構わない」

愛「ひるぎくん」

浩「どうした愛子、顔赤いぞ」

愛「浩樹君、協力するからお礼として、服脱いで」

浩「なにゆえ!？」

愛「ボク……は……浩……君と……一緒に・zzz」

浩「寝た、のか」

しかし一体何故、これは、大人のオレンジジュース、酒じゃないか

浩「仕方ない、俺は愛子を家まで送っていくそしてそのまま帰る」
帰り道

愛「ん、……浩樹君……」

浩「寝ぼけてんのか」

愛「浩樹君、大好き」

浩「俺も、大好きだ」

愛「……」愛子が寝ているのを確認して愛子の家に着いた

コンコン

「はい」

浩「こんばんは、自分、愛子さんと同じ学園に通ってる火群浩樹と
います、愛子さんが学園祭の打ち上げで疲れたらしく寝てしまっ
たので送ってきました」

愛母「わざわざありがとう、アナタが浩樹君だったの」

浩「自分のこと、ご存知で？」

母「そうよ、家じゃいつも浩樹君、浩樹君でいつも行っているのよ、これからも愛子のことよろしくね」

浩「はい」

俺は愛子を降ろそうするが

浩「あれ？」

愛子が俺の制服を掴んで離さない

浩「すいません愛子起きるまでここにいていいですか？」

母「ええ、上がって」浩「お邪魔します」

「浩樹君、アナタ親いないんですって？」

「何故その頃を」

「愛子が涙目で帰ってきたから理由を聞いたのそれになるほどならばわかっていてもおかしくない」

「そこで私からの提案何だけど、浩樹君、ウチに住まない？」
え？

「へ、何故」

「私の気使い、駄目？」

「構いませんが部屋はあるのですか？」

「大丈夫、あるわよ、よかった、家の荷物は明日郵便で運んで貰うから」

おかしい、そこは引越し業者のはず

「とりあえず、今日はウチに泊まりなさい」

「ありがとうございます」

「う、うーんここは？」

「ここは自分の家よ」

「あ、お母さん」

「お、目、覚めたか？」

「浩樹君！？何でここに？」「私が泊まるように言ったの」

「ホント！？、ワァイ浩樹君と一緒に」

「お礼と言つては何ですが、夕御飯、自分が作りましょうか？」

「そんな、いいのよそれにそんな固くならなくていいわ、普通に私のことをお母さんと呼んでいいのよ」

「お母さん、浩樹君に作つて貰おうよ」

「中華でいいですか？」

「ええ」

「できました」

「あら美味しいわ、ありがとうね」

「浩樹君、一緒にお風呂入ろっ」

「まてまてまてまていきなり過ぎるわ」

その後すぐに風呂に入り床に着いた

秀吉SIDE

数時間前

木下家

うーむどうするかの

「ただいま」

あの声は姉上じゃ

「お帰りなのじゃ」

「秀吉、何か悩んでいるの、姉弟なんだから悩み事しないで、一緒に考えてあげるから」

「じつは・・・・・・・・・・・・・・・・かくかくじかじかというわけなのじゃ」

「なるほど、秀吉はどうしたいの？」

驚いた姉上のことじゃから関節技喰らうと思ったのじゃ

「ワシは明久のことが好きなのじゃ」

「だったら迷うことはないわね」

「で、秀吉の性転換を赦してほしい、と」

「う、うむ」

「お父さん私からもお願い」

「ゆ、優子」

「私からもお願いするわ」

「母さんまで、わかった認めよう」

「ありがとなのじゃ、父上、母上、姉上」

「早速市役所に行くわよ」

「ゴクッ」

な、なんじゃなんだか体が熱いのじゃ

「秀吉、大丈夫？」

「大丈夫じゃ、体もしっかり女子になっておる」

浩樹SIDE

次の日

俺は6時に起きた、ふと横を見ると、隣の部屋で寝ていたはずの愛子がいた

「（何故！？）」

「おはよう浩樹君」

「おはよう愛子」

さてと俺は立ち上がり制服に着替えた

「それにしても浩樹君は睡眠中は無防備だったな」
後ろで愛子がつぶやいてきた

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

俺は愛子と二人で登校した

Fクラス

「諸君ここは何処だ？」

『最後の審判を下す法廷だ』

「異端者には？」

『『死の鉄槌を』』

「男とは？」

『『愛を捨て、哀に生きるもの』』

「よろしくではここに二年Fクラス異端S——」

「うるさいダメレ」

「おまえら席に着けHRを始める」

秀吉きてないな

「今日おまえらに知らせることがある、入ってこい」

「木下秀吉じゃ、皆よろしくの」

「秀吉が男から性転換して女になった以上」

「「秀吉さん俺と付き合ってください」」「」

「断る」

そんな会話が何回も続き昼休み

「明久、昼飯屋上で食うから先に行つててくれ」

「秀吉も先に行つてて」

「「わかつた（のじゃ）」」「」

秀吉SIDE

これはラッキーじゃこの間にワシは明久に

「秀吉（明久）」

「秀吉先いいよ」

「うむ」

落ち着け、大丈夫じゃ皆に貰ったこのチャンス必ずものにする

「明久、ワシは、おぬしのことが大好きじゃ！！」

言つたのじゃ明久の反応は

「秀吉、その、僕も秀吉のことが大好きだよ、だからこんな僕でよければよろしくお願いします」

や、やつたのじゃ

【パアン、パアン、パアン】

「「「秀吉、明久おめでとー」」「」

な、なんじゃ！？

浩樹SIDE

「その、僕でなければよろしくお願いします」
言った、今だ

【パンパンパン】

「「「秀吉、明久おめでとー」「」」

「おぬしら一体」

「すまんな秀吉、おまえの為だ」

「俺達もおまえの為、にやってやったんだ」

「てことは、姉上も？」

「そうよ」

「ワシは、ワシは、最高の姉と親友を持ったのじゃ！ー！（うあーん）

「秀吉が明久の胸の中で泣いている

「これより異端審問会を実行する」

「康太、おまえは親友の幸せと不幸どっちがいい」

「・・・俺は異端審問会を辞める」

「OK、明久、こいつらは俺達でどうにかする今のうち逃げろ、このグライダーを使え」

「ありがとっ、行こう秀吉」

「うむ」

「皆さん邪魔しないでください」

「そうよ邪魔しないで」

秀吉の決意そして祝福の鐘が鳴る？（前書き）

少し短いです

秀吉の決意そして祝福の鐘が鳴る？

「皆さん邪魔しないでください」

「そうよ邪魔しないで」

ハアこいつらか

「おまえら、何故明久に会いたい？」

俺は二人に尋ねた

「そんなね決まっているじゃない!!」
ほう

「お仕置きするためよ」

「ハア・・・・・・・・・・・・・・・・おまえらはやはり駄目だな、誰と付き合いおうが明久の自由だおまえらはなんだ？明久はおまえらのペットか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 「秀吉の勇気の勝ちなんだよ」

さてと明久を追いかけるか

Fクラス

いたいた

うわっ俺達、タイミング悪よりによってキスシーンとは

しかしこれも運命か昼休み終わりのチャイムが二人を祝福する鐘に聞こえた

俺と愛子と如月ハイランド（前書き）

如月ハイランド編始まります

俺と愛子と如月ハイランド

とある休日

俺は休みなので一日中寝ているつもりだった

「浩く樹君起きろー」

「グフウ」

「愛子、いきなり飛び掛かって来るな」

「浩樹君、ここに行くの」

愛子を取り出したのは如月ハイランドのチケットだった

「いつの間に」

「浩樹君が寝ている間に」

「わかった、着替えるから部屋から出といてくれ」

ちなみに愛子の服装は半袖Ｔシャツに半ズボンといったなかなかボーイッシュな服装だった

「さてと」

俺はタンズから半袖とその上に着る服を取り出しそれぞれきた、ちなみに上に着る服は袖は無いさらにジーパン（長）をはいて完了俺はドアを開けた

「行くぞ」

「う、うん／＼」

「あら、二人とも何処に行くの？」「此処まで」

「まあ、如月ハイランドプレミアムチケットじゃない、いつてらっしゃい

《浩樹君、やるならしっかりひに——》「

行ってきます」

「それじゃあ行ってきます」

如月ハイランド

「ここに行くの」

「あら如月ハイランドプレミアムチケットじゃない、いつてらっしやい」

「「行つてきます」」

如月ハイランド

「着いた、さあ行こう」

「チケットを拝見シマス」

「はい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「駄目なのか？」

「いえ、シバラく才まちクダサイ

奴らがきたウエディングシフトを成功させるぞ」

「ウエディングシフトってなんだ？」

「とりアエズ写真を撮りマス」

「カメラです」

「ワザワザどうも」

普通スタッフ同士ではお礼は言わない

「電話をする・・・自分のですね」よう雄二、なんの真似だ？」

「人違いです」

「待て!!」

「いまのはサリー・ウェーブ、デス坂本ナントカではありません」

「嘘ゆうな、俺は坂本なんて言つてない」

「とりあえず写真撮リマス」

「浩樹君ほら、撮ろ」

「ハイチーズ」

ちなみにポーズは愛子が俺と腕を組むというありがちなポーズだ

「シバラくお待ちクダサイ」

数分後

「どウゾ」

さつき撮った写真に私達結婚しますの文字、いくらなんでもこれはないだろ

「早く行こう」

俺は愛子に腕を引っ張られ中に入った

さて、と

「何乗る？」

「そこは男子が女子をエスコートするべきでしょ」
おっしやる通り

「じゃあ、ジェットコースターにでも乗るか」

「うん」

ジェットコースターに乗る時

「ドキドキするね」

「俺はワクワクしている、お前と一緒にいればいつも楽しい」

「ふえっ？」

愛子と会話をしていたらコースターが頂上に着いた

「行くぜ、3、2、1、0！、ヤアーアーハアー」

「楽しかったね」

「だな、次は」

「ねえ、そのラブラブな二人ともフィーがオススメのアトラクションを教えるね」

この声は

「姫路、バイトか？」

そう、Fクラスの優等生、姫路瑞希だ

「フィーは姫路じゃないよ、フィーは可愛い狐の女の子だよ」

「で？オススメは何処だ？」

「うん、フィーのオススメはあのお化け屋敷だよ」

「そうか……愛子、お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

「何ですか!？」

「明らかに何かを企んでいるからだ」

「そこまでだ、そのブサイクな男!!」

「その馬鹿さ加減は明久か」

「失礼な、僕——ノインの何処が馬鹿だと言っただ」

「お前は鏡でも見てろ

行くぞ愛子、あれ、愛子？」

遠くを見ると愛子がエセ外国人と話していた

「浩樹君お化け屋敷に行こう」

「何を言われた？」

「疑うなんて、ボクとは嫌?（涙目+上目遣い）」

これをやられると断れない

「わかった」

「デハ、契約書にサインを、」

契約書?

俺は契約書を見た

「これは結婚の時に使え、まあサインしてやる」

俺は契約書にサインした、これで、愛子とは許婚

「デハドウゾ」

「愛子、楽しかったな」

「うん」

「ランチを用意してありますのでこちらへ」

「此処はクイズ会場、か？」

「いらっしやいませ火群浩樹様、愛子様」

「秀吉、ウエストレスの真似か？」

「秀吉?なんのことですか」

演技モードか

「秀吉、明久が作戦終了後秀吉に話したい事があるそうだ」

「それはほんとか？」

「本当だ、秀吉、お前は明久の彼女だ、もし何かあっても明久を信じてやれ」

「わ、わかったのじゃ」

ん、うまいな

『なんと本日今日許婚になった高校生カップルがいます、そして如月ハイランドグループはそんな二人を応援するためウエディング体験プレゼントクイズをいたします

ご希望ならば即入籍も問題ありません』

大有りだ！！

『それでは火群浩樹さん&愛子さん前方ステージへ』

そうしておれのクイズが始まった

俺と愛子と如月ハイランド（後書き）

次回如月ハイランド編終了シマース

ウエディングギフトそして強化合宿前日（前書き）

ウエディングギフト終わりです

更新遅くてすみません

ウエディングギフトそして強化合宿前日

クイズ会場

「では、第一問、二人が許婚になったのは何時でしょう」
「は？問題の意味がわからん」

ピンポン

「今日のデートでお化け屋敷に入る時」

「おま、ちょ」

『正解です！』

まていや

「第二問、二人の出会いは何時でしょう」

「学校に行く朝ナンパされていた所を助けてくれた」

「やめる愛子、恥ずかしくて、体中赤くなるそうだ」

『正解です』

何故知っている、明久達か

「第三問二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？」

チャンス

ピンポン

「鮎の塩焼き」

これならどうだ

「正解です」

なんだと！？

『二人の挙式は当園にあるグランドホテル、森林の間、別名《鮎の塩焼き》で行われる予定です』

「まて、その別名は今考えたでしょう」

「第四問、参ります——」

ピンポン、これしかない

「よくわかっていない」

『正解です』

何！？

『問題は恐竜の絶滅などになったか、イロイロな絶滅説があるため、よくわかっていないのです』

やられた

『それではラスト』

「少し待ってください」

誰だ！！

『すいませんどちらでしょうか？』

「僕は東 あすまだいき 大生現役東大生だ」

ウケ狙いか？

「では問題、サッカーは試合中何人がボールを手で触れていい？」
なるほど、これは引っかけ問題か

「浩樹君、二人だよね」

ピンポン

「愛子、それはちがう答えは22人だ、GKはもちろん他の選手もスローイン等でボールに触る、なかなかの引っかけ問題だったぜ」

「お見事、正解だ」

「おめでとうございます、ウエディング体験です」

ウエディング体験

なんて大掛かりなんだよ

『それでは新郎のプロフィールを』

明久達の事だ省略するだろう

『省略します』

予想どうり

『それでは新婦の登場です』

愛子のドレス姿かどんなかな

『イベントの主演、工藤愛子さんです』

『綺麗』

会場からそんな呟きが聞こえた、確かに

『ではお二人共中央へ』

「愛子、行くぞ」

「うん」

『それでは指輪の交換を』

「指輪なんて持って無いぞ」

スタッフからサインがきた、ポケットの中、あつたよ

「愛子、嵌めるぞ」

『それでは、誓いのキスを』

「そこまでやるのか!？」

「浩樹君」

「愛子な——」

チュッ

不意打ちだった、俺はしばらく固まった

そしてデート終了後、俺達はまだ指輪をしていた、え？理由？、それは許婚だから

「帰ろうぜ、愛子」

「はい、アナタ」

「.....//」

やばい絶対顔赤い

工藤家

「あら、二人ともお揃いの指輪なんてして」

「今日は花嫁になったからね」

愛子、

「あら、あらあらかして、もう許婚とか」

「隠し切れないか、そうですな確かに許婚ですね、これ契約書です」

「浩樹君、愛子をよろしくね」

「はい、わかりました」

学校

「よおお前ら」

「浩樹君おはよう」

「おはようじゃ」

「おっす」

「…………おはよう」

「浩樹、その指輪は何だ？」

「雄二知ってるくせに、まあいい、婚約指輪だよ」

『『『異端者を殺せ』』』

『待て、美少女同士だからありなんじゃ』

『確かに、悩むな』

一生悩んでろ

「お前ら席に着けHRを始める」

そつえば、さっきから康太と明久達が隅で何かしている

「明日から始める『学力強化合宿』だが、大体のことは今配っているしおりに書いてあるので確認しておくように

集合時間と場所だけは間違えないようにいいか、Fクラスは現地集合だ」

『『『案内すらないのかよ！？』』』

その瞬間、皆が涙を流した、俺は流さない

「後、坂本、吉井、土屋、火群、木下、話があるから俺の所に来るように」

何だ？俺達まだ何もしていないのに

「なんだ鉄人」

「西村先生とよべ、お前らは、Aクラスと共に行く」

「へえー俺達はAクラスとか……………ってはい？」

「どうゆうことですか鉄人」

「Aクラスの工藤、霧島、木下姉、嵐丘が頼んできたんだ学園長も
気迫に負けたそうだ」

「わ、わかりました、俺達はAクラスの集合場所に向かいます」

明日から強化合宿か

ウエディングギフトそして強化合宿前日（後書き）

次回強化合宿始まります

強化合宿一日目（前書き）

本文が長い気がする

駄文かもしれませんが感想などよろしくお願いします

強化合宿一日目

強化合宿当日

「あ、きたきた」

「おはようございます」

「おはようございますじゃ」

「おっす」

「おはようございます」

「「何でFクラスの奴が？」」「」

「学園長の指示です」

バス移動中

「愛子、何で俺達をAクラスと同じにしたんだ？」

「婚約者だから」

「そうゆう事を此処では言うな／＼／＼」

恥ずいから

「これでもやらない？」

優子が心理テストの本を取り出した

「面白そうだな」

「じゃあ、『次の色でイメージする異性を挙げなさい』」

色のイメージか

「『？緑？オレンジ？青』だつて」

「僕は？秀吉？秀吉？秀吉、かな」↑明久

「解答次第ではアツアツだな、俺は？秀吉？愛子？愛子、だな」↑俺

「・・・・お前も同じ、俺は？啞魅？啞魅？啞魅」↑康太

「お前もな、俺は？秀吉？？はなしだな」↑雄二

「「つまない奴」」「」

「ボクは？浩樹君？浩樹君？浩樹君だよ」↑愛子

「私は？康太？康太？康太よ」↑啞魅
「・・・私は？？？全て雄二」↑霧島
「ワシは？？？全て明久じゃ」↑秀吉
「・・・お前ら全員暑いなあ」
俺、明久、康太、雄二の声がハモった
「えーと、緑は友達、オレンジは元気の源、青は好きな人」
「・・・お前アツアツだなあ」
またハモった

「『1から10の数字で今アナタが思い浮かべた数字を順番に二つ挙げて下さい』これ、男子だけやってみて」

「俺は5・6」↑雄二

「僕は1・4」↑明久

「・・・3・9」↑康太

「8・10」↑俺

「まず『最初に思い浮かべた数字はいつも周りに見せているあなたの顔を表しています』ですって」

「まず坂本君が『クールでシニカル』」

吉井君が『バカな人』

「ねえ僕はそんな顔してる？」

「大丈夫じゃ、明久がバカでもワシがおる」

「うわーん秀吉い」

「こうして見ると、明久が女で秀吉が男みたいだな」

「・・・確かに」

「とにかく続きは、土屋君が『とても慎重』」

火群君は『とてもないツンデレ』

「康太は慎重かあ」

「・・・自覚あり」

「確かに浩樹君って、ツンデレだよな」それもかなりの「
「そうなのか？」

「……自覚なし」

「『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だ
って

えーと坂本君が『公平で優しい人』

吉井君が『友達思い』

土屋君が『決意の固い人』

火群君が『かなり苦しんでいる人』だって」

「……雄二は優しい、流石私の夫」

「康太は決意が固いんだ」

「明久は友達思いだそうじゃ」

「……ッ！」

「?どうしたの浩樹君？」

「明久、いや、何でもない」

明久が結果の意味に気付かない今がチャンス

「浩樹、どうゆうことだ？」

「言わないという選択肢は？」

「ない」

「浩樹君、隠し事をしないで、お願い」

「愛子……わかった、俺が小さい頃、家族を殺さ
れた、ってゆうのは知っているな？」

「ああ、それは全員が知っている」

詳しくは番外編で

「最近は落ち着きかけてるがまだ見るんだその悪夢を」

「それで大分苦しんでいる、と」

「そうゆう事だ、流石雄二、こうゆう事は凄いな」

その後しばらく沈黙が続いたが

「こんな暗いムードやめやめ、とりあえず飯にしようぜ」

「浩樹君、まさか、この空気だと——」

「べ、別に、ただこんな暗いムードの中にいる愛子を見たくなかつ
たとかそんなんじゃないからね、そりゃあ、悪夢を見る回数が減っ

ている事に関しては感謝しているけどな」

「「「「「「「「「「ツンデレ」「」「」「」

「とりあえず飯だ飯」

そうして飯を食っていると

「浩樹君、はい、あゝん」

「愛子、何を」

「いいから、はい、あゝん」

「あ、あゝん（パクッ）」

「美味い」

「よかった、ボクの手作り料理食事者第一号なんだよね浩樹君は」

「マジ！？、ラッキー」

そんなこんなで旅館到着

「着いた」

「眠い」

「では、それぞれ自分の部屋へ、これが部屋の番号です」

「部屋行こうぜ」

部屋

部屋のメンバーは、俺、明久、康太、雄二だ

「・・・・昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「流石はムツリー二だね」

「・・・・手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」

「それは何の事だ？」

「実はねー事情説明中ーとゆう訳なんだ」

「成る程、で、康太、犯人はわからずも、何か情報はないのか」

「・・・・犯人はお尻に火傷の痕がある女生徒」

「「「お前（君）は一体何を調べたんだ」「」

「まあいい、それだけ情報があれば十分だ」

とりあえずウノでもやろうぜ」

「いいぜ」

ドバン

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい」

勢いよく扉が開けられ女子がわらわら入ってきた

「ご用件をどうぞ」

俺はとりあえず用件を聞いた

「あなたが犯人だって事ぐらいすぐ分かるのよ」

「意味がわからん」

「コレが脱衣所に設置されていたの」

目の前の女子確か小山だったかな、が小型カメラと小型マイクを取り出して突き付けてきた

「俺達じゃない」

「とぼけないであなたたち以外誰がやるの」

「しらん」

「美波、信じていたなら拷問器具を用意しないよね」

「……浮気は許さない」

「翔子待て！落ち着ぎやあああ」

はあ

「おい、姫路、島田、ちつくら O H A N A S I I しようぜ」

俺は二人の服を引っ張り外に出た

「お前らそこに正座しろ」

「でも——」

「正座」

「だから——」

「三回言わせる気？」

「「正座します」」

「まずは島田、姫路、お前らは明久の事好きなんだよな」

「そつよだから何？」

「はあ、宣言する、お前らは明久を好きになる資格は無い」

「なんですか？」

「自覚なし……か、いいか、お前らはなんで明久を拷問しようとした？」

「アキが脱衣所に小型カメラと小型マイクを設置したからよ」

「犯人だと証拠は？」

「あの道具が証拠よ」

「ちっ、やはり駄目だな」

「島田に姫路、何があったのじゃ？」

「秀吉に尋ねられたが俺は」

「知らぬが仏、言わぬが花だ」

「とりあえずごまかしといた

「話は以上だ戻ってよし」

部屋の中

「ほう、小山、まだ俺達を疑うか」

「当たり前よ、何回も言うけどあなたたち以外誰がやるの？」

「明久はそんなことしないのじゃ」

「秀吉」

「そうだよ」

「………啞魅」

「だね」

「愛子」

「そうだ愛子、尻に火傷の痕がある女子を知らないか？」

「わからないな、なんで？」

「実は、カクカクシカジカ、とゆう訳なんだ」

「わかった、秀吉さんや啞魅に伝えとくれ」

「助かる、ちなみに少人数で探ってくれ」

「ハイハイ」

その後

「面白れえ、だったらやってやろっじゃねーか」

「何をだ？」

「覗きだ」

「覗き？雄二、正気か？」

「ああ、そうだ」

「スマン雄二、俺はパス」

「な！？」

「ゴメン雄二、僕も降りるよ」

「明久もだと！？ならムツツリー二」

「……俺もやらない」

「なんだと！？なら他の奴を誘っていく」そういつて雄二は部屋を出でいった

「康太、明久、覗きを断ったのは何故だ？」

「多分君と同じ理由かな」

「……（コクコク）」

「べ、別に俺は愛子の為とかじゃ無いからな」

「……素直じゃない」

「だね」

「明久、康太、俺達は陰からあいつらを妨害するぞ」

「了解」

「とりあえず寝るか」

その後雄二は覗きにいったが教師に打ちのめされたらしい帰ってきたのは11時過ぎだった

私のやるべきことはただ一つ（前書き）

更新遅くてすみません

「イーんじゃね、別にみるひと少ない駄文なんだしサ」

「黙っとれくそ主人公」

「ヘボ作者」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「傷つくならやんなきゃいいのに」

「そいゆうな唾魅」

「そうだ、本当の事しか言ってない」

「てか俺って、作者がモデルなんだよな、主に性格」

「つまり、自分を自分で傷つけてるって事？」

「そいゆう事だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（しくしくしく）」

「あーあ、作者が部屋の隅で泣いてるよ」

「とりあえず本文をどうぞ」

私のやるべきことはただ一つ

強化合宿一日目の日記を書きなさい

吉井明久の日記

『バスの中で心理テストをやったりして楽しかった、ただ旅館で女子にカメラ設置した疑いをかけられた、でも秀吉達が信用してくれたのが嬉しかった』

教師のコメント

それは災難でしたね

確か木下さんは性転換をして吉井君の彼女になったのでしたね、そんな彼女を大切にして下さい

火群浩樹の日記

『始め楽しかった

旅館、女子が面倒くさかった、姫路と島田に説教したり、まあ愛子達が俺達を信じてくれたのが嬉しかったりする』

教師のコメント

君もですか、しかし島田さんとはかく、姫路を説教するとは、一体何があったのですか？』

土屋康太の日記

『バス楽しい

旅館、最悪のち最高』

教師のコメント

もう少し具体的に書いて下さい

勉強部屋

「・・・・雄二、一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当たり前のように俺の膝の上に座ろうとするな！」

隣では坂本夫婦がイチャイチャしていた

「誰が夫婦だ！！」

「勝手に地の文（心）を読むな！」

カリカリカリカリ

「浩樹君此処にいたんだ」

「お、愛子」

「坂本君、昨日覗きに來たんだって？、言ってくれたらいいのに、ボクのでよければみせるよ」

ブスッ

ブシャアアアア

「目が、目が！」

「ムツツリー二どうしたの僕はこんなにドキドキしてるのに」

「・・・・俺には唾魅がいる」

「そうだった、僕には秀吉がいるんだ」

「愛子、頼むそうゆう事を辞めてくれ」

「なんで？浩樹君」

「お前の下着を誰にも見せたくない」

「・・・・・・／／／／」

何だろう、周りの目がうざい

「浩樹君、その、大丈夫だよ、スパッツ履いてるし」

「そうかよかった」

「最近のボクの嵌まっているのはこれ」

愛子を取り出したのは小型録音機

『秀吉、僕、こんなにドキドキしているんだ、やらない？』
再生されたのは明久の声

「明久、その、ワシもじゃ」

「工藤さん、やめてよ、秀吉、顔を赤めないで」

「アハハ、やっぱり吉井君は面白いなあ」

「愛子とりあえず座れ」

「ん、わかった」

そして愛子は座った、俺の膝の上に

「待て愛子、何故当然の様に俺の膝の上に座る」

「座れって言ったじゃん」

「確かに言ったが座布団に座れって意味だ」

「ちえ」

そう言つて愛子は渋々座布団に座った

ピッ

『秀吉、僕の膝の上に座って勉強して』

「ちよつと、工藤さん！」

「わかったのじゃ!!」

「秀吉ちよつと!？」

「あ、皆此処にいたんだ」

「おう、咂魅、康太に会いに来たのか？」

「そだよ」

「（愛子、小型録音機貸してくれ）」

「（いいよ）」

ピッ

『《咂魅》《俺の》《膝》《の上で》《勉強しようぜ》』

「……浩樹、酷い」

「わかった、おのぞみのままに」

これで、明久と康太、二人の膝の上にそれぞれの彼女がいる

「さてと、愛子《俺の》《膝の上》《に座ってくれ》って、康太、何をしゃがる」

「・・・復讐」

「わかったよ浩樹君」
もういいや

「諸君、ここはどこだ？」

「『最期の審判を下す法廷だ！』」

「異端者には？」

「『死の鉄槌を！』」

「男とは？」

「『愛を捨て、哀に生きるもの！』」

「宜しい、では、総員、発射！！」

殺気がしたため振り返ると無数の力ッターが飛んできた

「明久！、康太！」

「『コクッ』」

「『奥義、畳返し』」

スカスカッ

危なかった、この部屋が畳でよかった

「（明久、康太、秀吉と咂魅を連れてちょっとこい）」

「『（わかった）』」

アイコンタクト終了

「（で、話って何）」

「俺達三人は覗き団体を内側から潰す」

「どうやって？」

「俺達も参加する

愛子、火傷女子わかったか？」

「うん、あれは、清水さんだったよ」

清水美春か

「わかった、皆、俺達三人は覗き参加するふりして雄二が離れたら、裏切る」

「成る程、わかった」

「……俺も了解」

「そいゆう事だ、愛子達もこの事は秘密で頼む」

「「「わかった」」」

「じゃあ、康太、明久、早速、勉強するか、点数が低かったら意味ないからな」

「うう……. わかった、これも秀吉の裸を守る為だもんね」

「そいゆう事だ、この解説付きプリントやっとなければいい点数採れるはずだ」

「雄二、ちよつといいか？」

「なんだ？」

「俺、康太、明久も明日から覗きに参加する」

「本当か！？よっしゃこれで行けるぜ」

「しかし、霧島の裸が見たいなら霧島に言えばいいのに」

「違う！！」

「わかったわかった用件は以上だ」

「明日頼りにしてるぜ」

くくく、明日が楽しみだ。
色んな意味で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9065u/>

バカとFクラスと疑心暗鬼

2011年10月9日12時04分発行